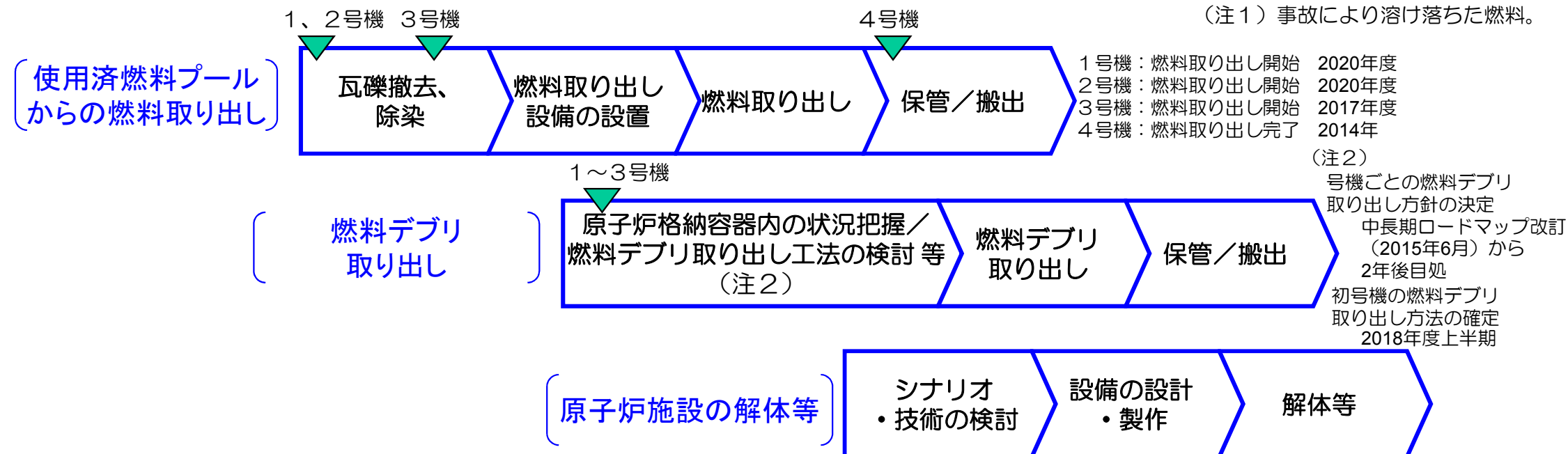


## 「廃炉」の主な作業項目と作業ステップ

～4号機使用済燃料プールからの燃料取り出しが完了しました。1～3号機の燃料取り出し、燃料デブリ(注1)取り出しの開始に向け順次作業を進めています～



### プールからの燃料取り出しに向けて

1号機の使用済燃料プールからの燃料取り出しに向け、建屋カバーの解体作業を進めています。

2015年7月より建屋カバーの解体を開始しています。作業にあたっては、十分な飛散抑制対策と、放射性物質濃度の監視を行いながら、着実に進めてまいります。



(1号機建屋カバー解体作業の状況)

## 「汚染水対策」の3つの基本方針と主な作業項目

～事故で溶けた燃料を冷やした水と地下水が混ざり、1日約300トンの汚染水が発生しており、下記の3つの基本方針に基づき対策を進めています～

### 方針1. 汚染源を取り除く

- ①多核種除去設備等による汚染水浄化
- ②トレンチ(注3)内の汚染水除去  
(注3) 配管などが入った地下トンネル。

### 方針2. 汚染源に水を近づけない

- ③地下水バイパスによる地下水汲み上げ
- ④建屋近傍の井戸での地下水汲み上げ
- ⑤凍土方式の陸側遮水壁の設置
- ⑥雨水の土壌浸透を抑える敷地舗装

### 方針3. 汚染水を漏らさない

- ⑦水ガラスによる地盤改良
- ⑧海側遮水壁の設置
- ⑨タンクの増設（溶接型へのリプレイス等）



### 多核種除去設備(ALPS)等

- ・タンク内の汚染水から放射性物質を除去しリスクを低減させます。
- ・多核種除去設備に加え、東京電力による多核種除去設備の増設（2014年9月から処理開始）、国の補助事業としての高性能多核種除去設備の設置（2014年10月から処理開始）により、汚染水（RO濃縮塩水）の処理を2015年5月に完了しました。
- ・多核種除去設備以外で処理したストロンチウム処理水について、多核種除去設備での処理を進めています。



(高性能多核種除去設備)

### 凍土方式の陸側遮水壁

- ・建屋を陸側遮水壁で囲み、建屋への地下水流入を抑制します。
- ・2013年8月から現場にて試験を実施しており、2014年6月に着工しました。
- ・2015年4月末より試験凍結を開始しました。
- ・山側部分の工事が2015年9月に完了しました。
- ・海側部分の工事は凍結管削孔が10月に完了しました。(陸側遮水壁 配管敷設状況)



### 海側遮水壁

- ・1～4号機海側に遮水壁を設置し、汚染された地下水の海洋流出を防ぎます。
- ・遮水壁を構成する鋼管矢板の打設が2015年9月に、鋼管矢板の継手処理が2015年10月に完了し、海側遮水壁の閉合作業が終わりました。



(設置状況)



## 取り組みの状況

- ◆ 1～3号機の原子炉・格納容器の温度は、この1か月、約20℃～約40℃※<sup>1</sup>で推移しています。  
また、原子炉建屋からの放射性物質の放出量等については有意な変動がなく※<sup>2</sup>、総合的に冷温停止状態を維持していると判断しています。
- ※<sup>1</sup> 号機や温度計の位置により多少異なります。  
※<sup>2</sup> 1～4号機原子炉建屋からの放出による被ばく線量への影響は、2015年9月の評価では敷地境界で年間0.0032ミリシーベルト未満です。  
なお、自然放射線による被ばく線量は年間約2.1ミリシーベルト（日本平均）です。

### 1号機原子炉建屋カバー屋根パネル取外し完了

1号機原子炉建屋上部のガレキ撤去に向け、7/28より原子炉建屋カバーの屋根パネル取り外しを開始し、10/5に全ての取り外しが完了しました。

敷地内に設置してある放射性物質濃度を監視しているダストモニタや敷地境界に設置してあるモニタリングポストに有意な変動はありませんでした。

今後、飛散防止剤の定期散布・ガレキ状況調査等を行った後、飛散抑制対策である散水設備の設置に向け支障鉄骨の撤去を行います。



＜撤去予定の支障鉄骨例＞

### 海側遮水壁閉合完了

汚染された地下水の海洋への流出を防ぐため、海側遮水壁を設置してきました。

9/22に鋼管矢板の打設が完了した後、引き続き、鋼管矢板の継手処理を行い、10/26に海側遮水壁の継手処理が完了しました。

これにより、海側遮水壁の閉合作業が終わり、汚染水対策が大きく前進しました。

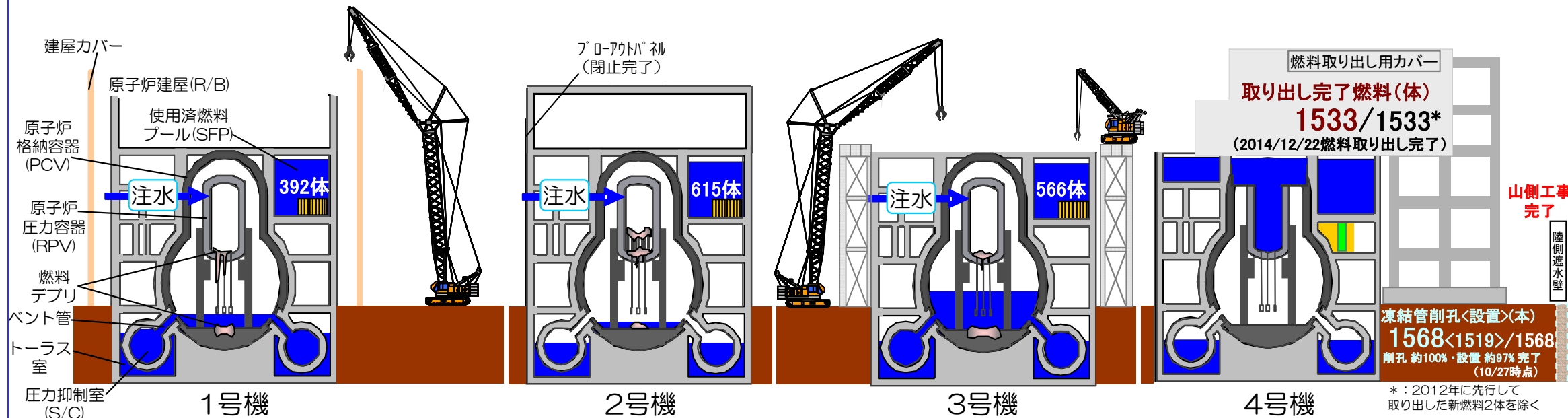
### 櫛葉遠隔技術開発センターが開所

福島第一原子力発電所の廃止措置推進のために、国立研究開発法人日本原子力研究開発機構（JAEA）が遠隔操作機器・装置の開発・実証試験施設（櫛葉遠隔技術開発センター）の整備を進めています。

櫛葉遠隔技術開発センターの研究管理棟が完成し、一部運用開始を行うため、10/19に開所式を開催しました。本センターでは、引き続き試験棟の整備を進め、来年度の本格運用開始を目指しています。



＜除幕の様子＞



### 陸側遮水壁削孔工事の完了

先行して凍結を開始する陸側遮水壁山側の工事は、9/15に完了しています。

海側についても凍結管、測温管を設置するための削孔工事が10/15に完了しました。引き続き、陸側遮水壁海側の凍結管、配管の設置等の工事を行っています。

### 3号機使用済燃料プール内大型ガレキ撤去状況

3号機使用済燃料プールからの燃料取り出しに向け、大型ガレキ撤去作業を進めています。

10/15、3号機使用済燃料プール内の大型ガレキの1つである原子炉冷却材浄化系ろ過脱塩器(CUW F/D)ハッチ蓋注を撤去し、燃料ラック上の大型ガレキの撤去が完了しました。

撤去後、ハッチ蓋の下の燃料集合体4体のうち2体において、ハンドル部がわずかに変形していることを確認しました。今後、取り扱いについて検討してまいります。

注) 約1m×約1m×約2m、水中重量約2.6tのコンクリート製の構造物



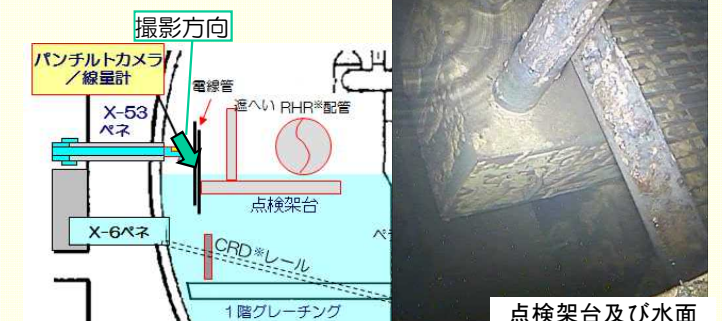
＜CUW F/Dハッチ蓋撤去作業状況＞

### 3号機原子炉格納容器内部調査の実施

3号機原子炉格納容器内を確認するため、10/20,22に格納容器内部へ調査装置を入れ、映像、線量、温度の情報の取得、内部の滞留水の採取を行いました。

格納容器内の構造物・壁面に損傷は確認されず、水位は推定値と一致していました。また、内部の線量は他の号機に比べて低いことがわかりました。

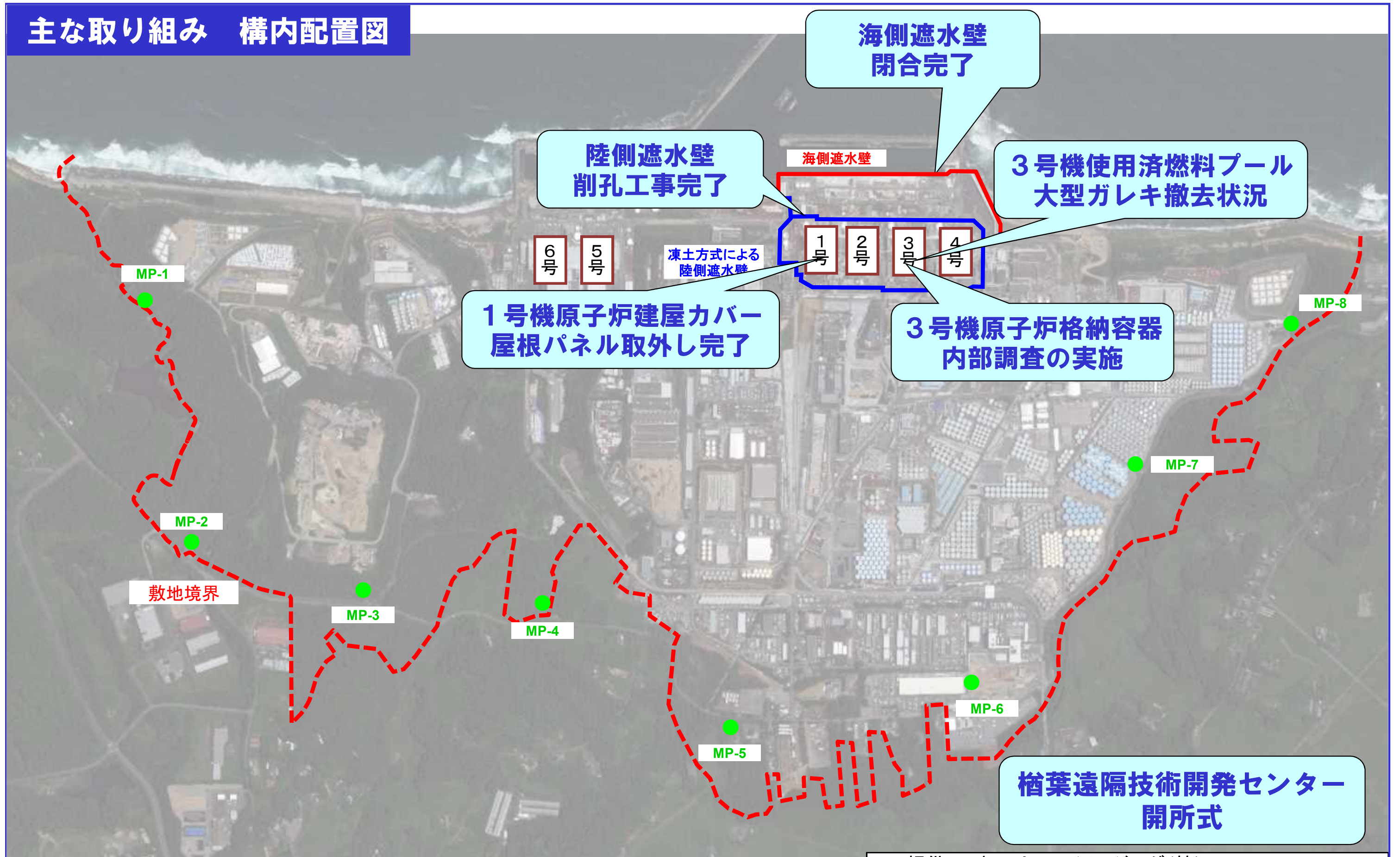
今後、得られた情報の分析を行い、燃料デブリ取り出し方針の検討等に活用します。



＜格納容器内部調査状況＞



# 主な取り組み 構内配置図



提供：日本スペースイメージング(株)、(C)DigitalGlobe

※モニタリングポスト（MP-1～MP-8）のデータ

敷地境界周辺の空間線量率を測定しているモニタリングポスト(MP)のデータ（10分値）は $0.910\mu\text{Sv/h}$ ～ $3.508\mu\text{Sv/h}$ （2015/9/30～10/27）。

MP-2～MP-8については、空間線量率の変動をより正確に測定することを目的に、2012/2/10～4/18に、環境改善（森林の伐採、表土の除去、遮へい壁の設置）の工事を実施しました。

環境改善工事により、発電所敷地内と比較して、MP周辺の空間線量率だけが低くなっています。

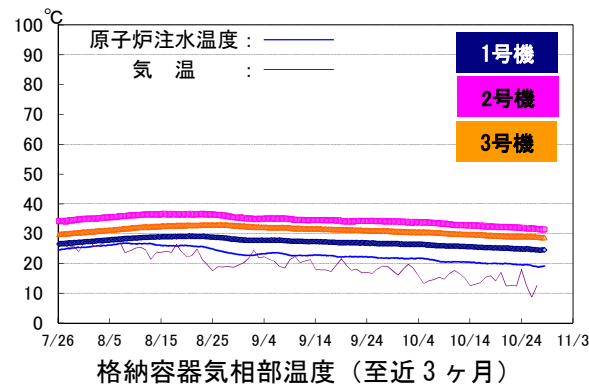
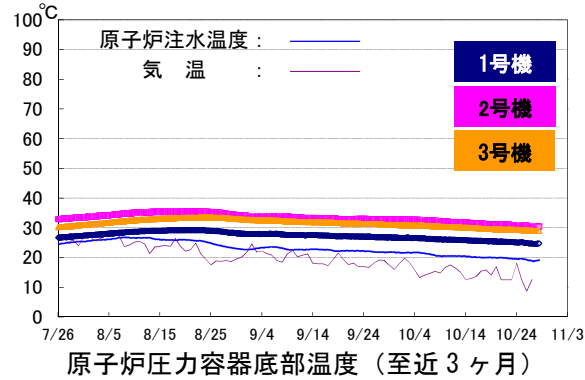
MP-6については、さらなる森林伐採等を実施した結果、遮へい壁外側の空間線量率が大幅に低減したことから、2013/7/10～7/11にかけて遮へい壁を撤去しました。



## I. 原子炉の状態の確認

### 1. 原子炉内の温度

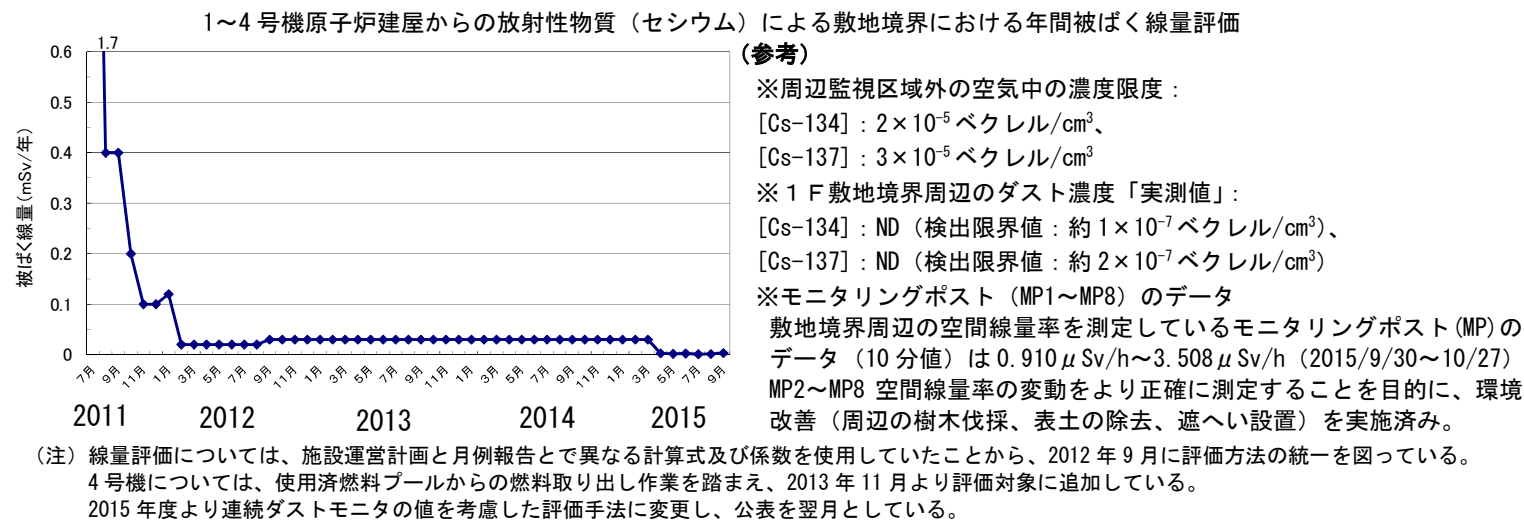
注水冷却を継続することにより、原子炉圧力容器底部温度、格納容器気相部温度は、号機や温度計の位置によって異なるものの、至近1ヶ月において、約20～40度で推移。



※トレンドグラフは複数点計測している温度データの内、一部のデータを例示

### 2. 原子炉建屋からの放射性物質の放出

2015年9月において、1～4号機原子炉建屋から新たに放出される放射性物質による、敷地境界における空气中放射性物質濃度は、Cs-134 約  $1.0 \times 10^{-10}$  ベクレル/cm<sup>3</sup> 及び Cs-137 約  $2.5 \times 10^{-10}$  ベクレル/cm<sup>3</sup> と評価。放出された放射性物質による敷地境界上の被ばく線量は0.0032mSv/年未満と評価。



### 3. その他の指標

格納容器内圧力や、臨界監視のための格納容器放射性物質濃度（Xe-135）等のパラメータについても有意な変動はなく、冷却状態の異常や臨界等の兆候は確認されていない。

以上より、総合的に冷温停止状態を維持しており原子炉が安定状態にあることが確認されている。

## II. 分野別の進捗状況

### 1. 汚染水対策

～地下水流入により増え続ける滞留水について、流入を抑制するための抜本的な対策を図るとともに、水処理施設の除染能力の向上、汚染水管理のための施設を整備～

#### ➤ 地下水バイパスの運用状況

- 2014/4/9 より 12 本ある地下水バイパス揚水井の各ポンプを順次稼働し、地下水の汲み上げを開始。2014/5/21 より内閣府廃炉・汚染水対策現地事務所職員の立ち会いの下、排水を開始。2015/10/28 までに 142,351m<sup>3</sup> を排水。汲み上げた地下水は、一時貯留タンクに貯留し、水質が運用目標未満であることを東京電力及び第三者機関で確認した上で排水。
- 排水先を K 排水路末端部から旧 C 排水路に切り替え（南方へ約 160m 移動）、10/21 より排水。

- 揚水井 No. 1, 9 について清掃のため地下水汲み上げを停止（No. 1:9/7～10/2, No. 9:10/6～）。

#### ➤ サブドレン他水処理施設の状況について

- 建屋へ流れ込む地下水の量を減らすため、建屋周辺の井戸（サブドレン）からの地下水の汲み上げを 9/3 より開始。汲み上げた地下水は専用の設備により浄化し、9/14 より排水を開始。10/28 までに 14,916m<sup>3</sup> を排水。浄化した地下水は水質が運用目標未満であることを東京電力及び第三者機関にて確認した上で排水。

#### ➤ 陸側遮水壁の造成状況

- 1～4号機を取り囲む陸側遮水壁（経済産業省の補助事業）の造成に向け、凍結管設置のための削孔工事を開始（2014/6/2～）。
- 山側部分について 7/28 に凍結管の設置が完了し、その後、9/15 にブライン充填完了。これにより、山側3辺の凍結準備が完了。
- 4/30 より、18箇所（凍結管 58 本、山側の約 6%）において、試験凍結を実施中。ブライン充填作業に伴い、8/21 より試験凍結箇所へのブライン供給を停止。
- 海側部分について、10/15 に削孔完了（凍結管用：532 本、測温管用：131 本）。10/27 時点で凍結管 483 本／532 本（91%）建込（設置）完了（図2参照）。

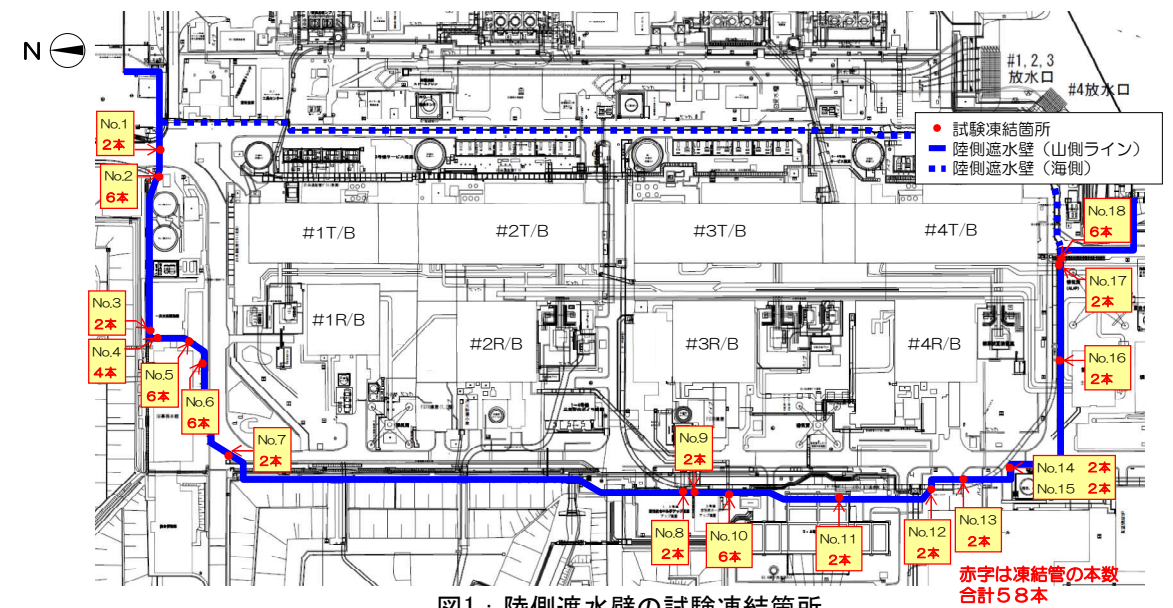


図1：陸側遮水壁の試験凍結箇所

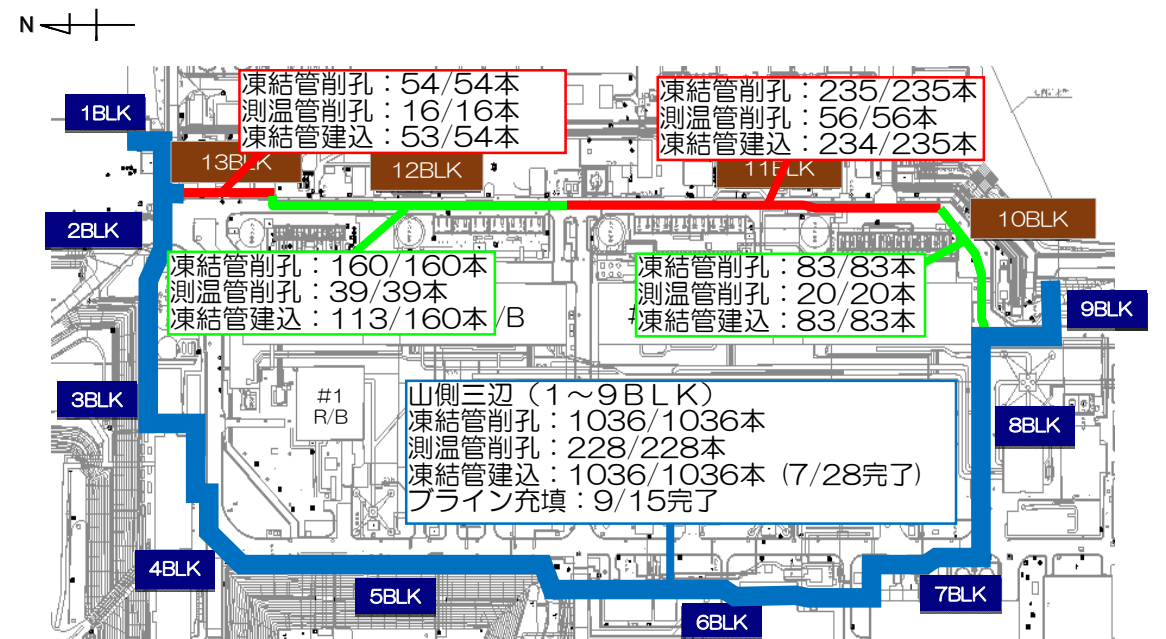


図2：陸側遮水壁削孔工事・凍結管設置工事の状況

➤ 多核種除去設備の運用状況

- 多核種除去設備（既設・増設・高性能）は放射性物質を含む水を用いたホット試験を実施中（既設 A 系：2013/3/30～、既設 B 系：2013/6/13～、既設 C 系：2013/9/27～、増設 A 系：2014/9/17～、増設 B 系：2014/9/27～、増設 C 系：2014/10/9～、高性能：2014/10/18～）。
- これまでに多核種除去設備で約 254,000m<sup>3</sup>、増設多核種除去設備で約 213,000m<sup>3</sup>、高性能多核種除去設備で約 89,000m<sup>3</sup>を処理（10/22 時点、放射性物質濃度が高い既設 B 系出口水が貯蔵された J1(D) タンク貯蔵分約 9,500m<sup>3</sup>を含む）。
- 既設多核種除去設備 A 系及び C 系は、設備点検及び性能向上のための吸着塔増塔工事を実施中（5/24～）。B 系は点検に伴い発生する排水や R0 濃縮塩水の残水等の処理を行うため適宜運転し、A・C 系の点検終了後に点検を行う。
- Sr 処理水のリスクを低減するため、増設多核種除去設備、高性能多核種除去設備にて処理を実施中（増設：5/27～、高性能：4/15～）。これまでに約 118,000m<sup>3</sup>を処理（10/22 時点）。

➤ タンク内にある汚染水のリスク低減に向けて

- セシウム吸着装置（KURION）でのストロンチウム除去（1/6～）、第二セシウム吸着装置（SARRY）でのストロンチウム除去（2014/12/26～）を実施中。10/22 時点で約 132,000m<sup>3</sup>を処理。

➤ タンクエリアにおける対策

- 汚染水タンクエリアに降雨し堰内に溜まった雨水のうち、基準を満たさない雨水について、2014/5/21 より雨水処理装置を用い放射性物質を除去し敷地内に散水（2015/10/26 時点で累計 38,700m<sup>3</sup>）。

➤ 淡水化装置（R02）からの漏えいについて

- 10/16、淡水化装置（R02）の薬品注入用予備配管が損傷し、R0 処理水（淡水）が漏えいしていることを確認。漏えい量は最大約 1m<sup>3</sup>。漏えい水は堰内に留まっており、外部への流出は無し。

- 配管損傷部について、目視観察を行った結果、応力集中が受け易い構造、かつ配管が片持ち梁の構造に、ポンプの運転に伴う振動や配管の脈動による繰り返し荷重が作用した結果、疲労によりき裂が発生・進展したものと推定。当該予備配管は、今後使用する予定がないことから、撤去し閉止する。また、淡水化装置の塩化ビニール配管について、目視点検を行う。

➤ 淡水化装置（R03）からの漏えい事象の調査結果と対策

- 8/12 に発生した淡水化装置（R03-3）からの漏えいについて、漏えい部の浸透探傷検査、放射線透過検査及び目視観察を行った結果、配管溶接部の溶込み不足による構造不連続部に、高圧ポンプの運転に伴う振動による繰り返し荷重が作用した結果、疲労によりき裂が発生・進展したものと推定。当該溶接部及び、淡水化装置にて溶込み不足が確認された他の配管溶接部については配管を交換予定。

2. 使用済燃料プールからの燃料取り出し

～耐震・安全性に万全を期しながらプール燃料取り出しに向けた作業を着実に推進。4 号機プール燃料取り出しは 2013/11/18 に開始、2014/12/22 に完了～

➤ 1 号機使用済燃料取り出しに向けた主要工事

- 7/28 より建屋カバー屋根パネル取り外しを開始し 10/5 に屋根パネル全 6 枚の取り外し完了。ダストモニタ及びモニタリングポストのダスト濃度等に、有意な変動は確認されていない。引き続き、オペレーティングフロアの調査を実施中。11 月より散水設備設置に支障となる鉄骨撤去を行う。
- 建屋カバー解体工事にあたっては、飛散抑制対策を着実に実施するとともに、安全第一に作業を進めていく。

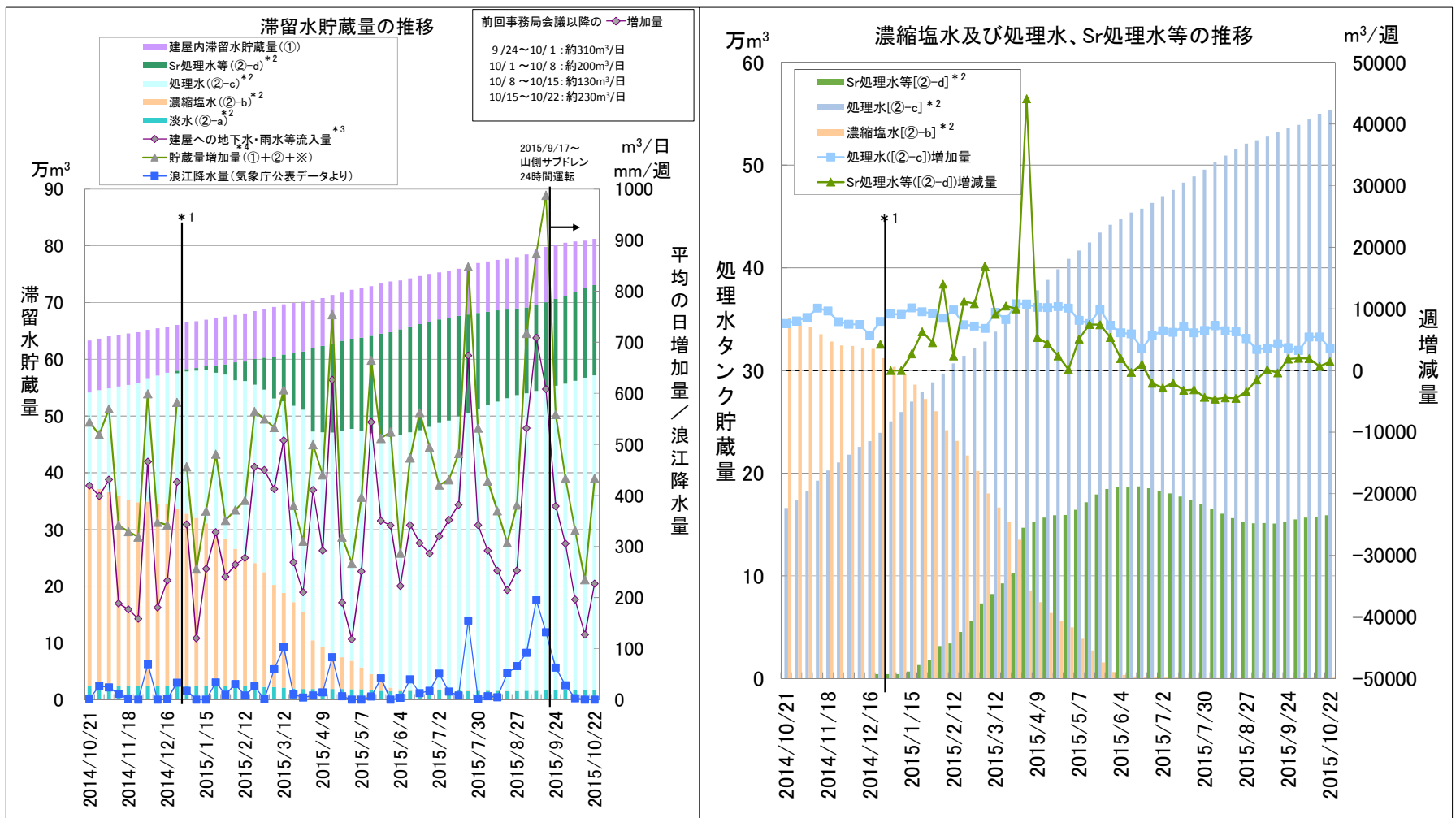


図3：滞留水の貯蔵状況

2015/10/22 現在

\*1：2015/1/1 より集計日を変更（火曜日→木曜日）  
\*2：水位計 0%以上の水量  
\*3：2015/9/10 より集計方法を変更  
（建屋・タンク貯蔵量の増加量からの評価  
→建屋貯蔵量の増減量からの評価）  
「建屋への地下水・雨水等流入量」＝  
「建屋保有水増減量」＋「建屋からタンクへの移送量」  
－「建屋への移送量（原子炉注水量、ウェルポイント等からの移送量）」  
\*4：2015/4/23 より集計方法を変更  
（貯蔵量増加量（①＋②）→（①＋②＋※））



➤ 2号機使用済燃料取り出しに向けた主要工事

- ・2号機原子炉建屋からのプール燃料の取り出しに向け、大型重機等を設置する作業エリアを確保するため、9/7から作業に支障となる周辺建屋の解体等を実施中。

➤ 3号機使用済燃料取り出しに向けた主要工事

- ・使用済燃料プール内の大型ガレキの1つである CUV F/D ハッチ蓋の撤去作業を実施（9/22～10/15）。これにより、燃料ラック上の大型ガレキの撤去が完了。撤去後新たに確認できた使用済燃料4体のうち、2体の燃料について燃料ハンドルがわずかに変形していることを確認。今後は燃料取出の検討の中で当該燃料の詳細な調査を行う予定。引き続き、その他のガレキ撤去作業を実施中（11月完了予定）。

3. 燃料デブリ取り出し

～格納容器へのアクセス向上のための除染・遮へいに加え、格納容器漏えい箇所の調査・補修など燃料デブリ取り出し準備に必要な技術開発・データ取得を推進～

➤ 1号機原子炉建屋1階TIP室調査

- ・将来の原子炉格納容器内部調査や原子炉格納容器補修に向け線量低減が必要か確認するため、TIP室の調査を9/24～10/2に実施。原子炉格納容器側のX-31～33ペネ（計装ペネトレーション）が高線量、その他は低線量であり、TIP室内での作業が可能な見込みであることを確認（図4参照）。

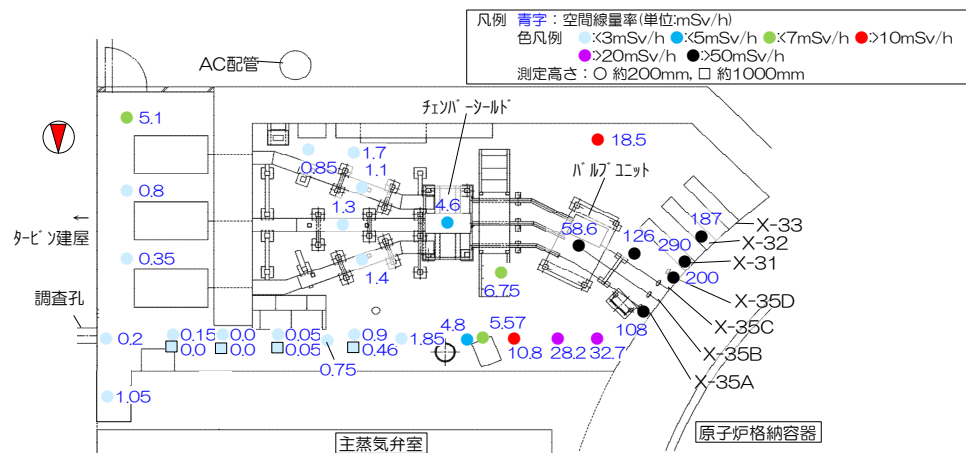


図4：1号機TIP室調査結果（空間線量率）

➤ 2号機X-6ペネ汚染調査結果

- ・2号機原子炉格納容器ペDESTAL内プラットフォーム状況調査（A2調査）に向け、X-6ペネ前の汚染調査を実施。
- ・X-6ペネ内部からの線量寄与は最大1Sv/hであること、X-6ペネからの溶出物を中心に汚染が形成されていること、溶出物は固化しておりヘラ等で容易に掻き取り可能であることを確認（図5参照）。

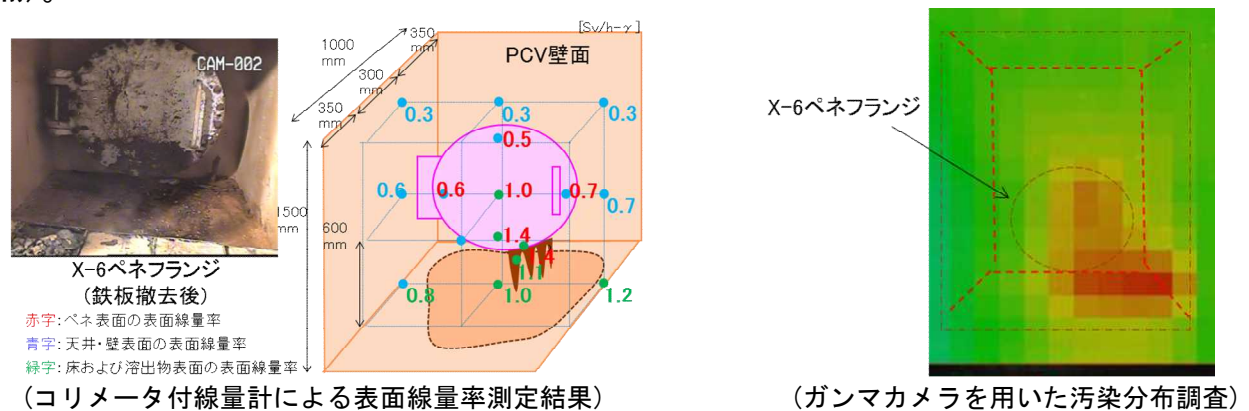


図5：2号機X-6ペネ周辺調査状況

➤ 3号機原子炉格納容器機器ハッチ調査

- ・9/9に実施した小型カメラによる3号機機器ハッチ状況調査を踏まえ、11月より自走式の小型調査装置による調査を実施予定。

➤ 高所用ドライアイスブラスト除染装置の実機適用準備状況

- ・国プロ「原子炉建屋内の遠隔除染技術の開発」にて開発中の高所用ドライアイスブラスト除染装置について、実機適用に向けた改造が終了したことから、調整・習熟訓練の上、11月中旬以降に3号機原子炉建屋1階南西部への実機適用を計画。

4. 固体廃棄物の保管管理、処理・処分、原子炉施設の廃止措置に向けた計画

～廃棄物発生量低減・保管適正化の推進、適切かつ安全な保管と処理・処分にに向けた研究開発～

➤ ガレキ・伐採木の管理状況

- ・9月末時点でのコンクリート、金属ガレキの保管総量は約161,000m<sup>3</sup>（8月末との比較：+3,200m<sup>3</sup>）（エリア占有率：61%）。伐採木の保管総量は約82,100m<sup>3</sup>（8月末との比較：±0m<sup>3</sup>）（エリア占有率：64%）。ガレキの主な増加要因は、フェーシング関連工事、タンク設置関連工事など。

➤ 水処理二次廃棄物の管理状況

- ・2015/10/22時点での廃スラッジの保管状況は597m<sup>3</sup>（占有率：85%）。濃縮廃液の保管状況は9,315m<sup>3</sup>（占有率：47%）。使用済ベッセル・多核種除去設備の保管容器（HIC）等の保管総量は2,834体（占有率：47%）。

5. 原子炉の冷却

～注水冷却を継続することにより低温での安定状態を維持するとともに状態監視を補完する取組を継続～

➤ 1号機使用済燃料プール水の浄化

- ・1号機使用済燃料プール水について、建屋カバー撤去後の風雨等により塩分除去が必要となった際に備え、9/24～10/19に放射能除去を実施。

➤ 3号機原子炉格納容器内部調査・常設監視計設置

- ・3号機原子炉格納容器内の冷却状態の確認及び、今後の調査検討に資する情報を取得するため、格納容器貫通部（X-53ペネ）から調査装置を導入し、映像、線量、温度の情報の取得、内部の滞留水の採取を行いました。（10/20, 22）。格納容器内の構造物・壁面に損傷は確認されず、水位は推定値（OP. 約11,970）と概ね一致。また、内部の線量は他号機に比べて低いことを確認。今後、得られた情報の分析を行い、燃料デブリ取り出し方針等の検討に活用する。
- ・設置準備を行った後、12月にX-53ペネから格納容器内に温度計・水位計を設置する予定。

6. 放射線量低減・汚染拡大防止

～敷地外への放射線影響を可能な限り低くするため、敷地境界における実効線量低減や港湾内の水の浄化～

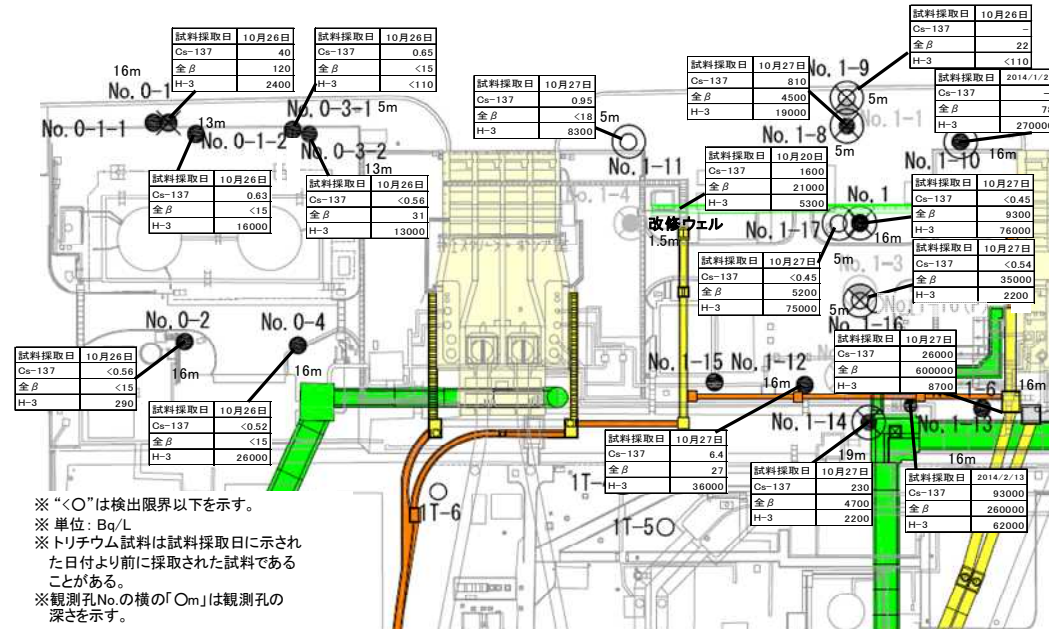
➤ 1～4号機タービン建屋東側における地下水・海水の状況

- ・1号機取水口北側護岸付近において、地下水観測孔No.0-4のトリチウム濃度が2014年9月から上昇傾向にあり、現在は30,000Bq/L程度で推移。No.0-3-2より1m<sup>3</sup>/日の汲み上げを継続。
- ・1、2号機取水口間護岸付近において、地下水観測孔No.1、No.1-17のトリチウム濃度は2015年3月以降同レベルとなり8万Bq/L程度で推移。2015年2月以降、地下水観測孔No.1の全β濃度は上昇傾向にあり現在8,000Bq/L程度、地下水観測孔No.1-17の全β濃度は低下傾向にあり現在5,000Bq/L程度で推移。改修ウェルポイントからの汲み上げを開始（10/14～）。
- ・2、3号機取水口間護岸付近において、ウェルポイントの全β濃度は9月に10,000Bq/L程度に上昇したが、改修ウェルポイントによる揚水開始以降低下が見られる。改修ウェルポイントからの汲み上げを開始（10/14～）。
- ・3、4号機取水口間護岸付近の地下水放射性物質濃度は、各観測孔とも低いレベルで推移。改修

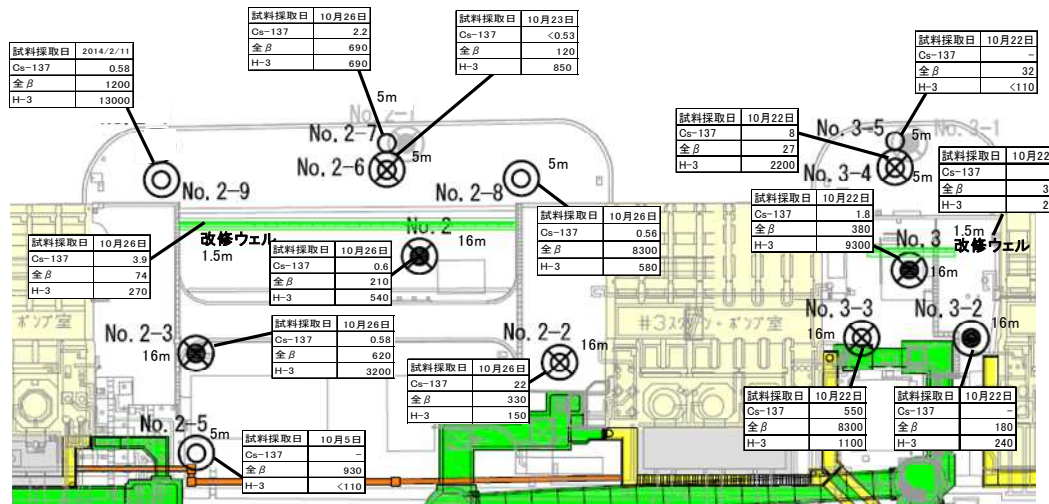


ウェルポイントからの汲み上げを開始(9/17～)。

- ・1～4号機開渠内の海側遮水壁外側、及び港湾内海水の放射性物質濃度は、海側遮水壁鋼管矢板打設完了、継手処理進捗の影響により低下傾向が見られる。
- ・港湾外海水の放射性物質濃度はセシウム137、トリチウムはこれまでの変動の範囲で推移。全β濃度について、これまで検出限界値未満(15～18Bq/L)が継続していたが、2015年3月下旬以降、検出限界値と同程度の濃度が検出されている。港湾口北東側の全β濃度について、6/15に24Bq/Lが検出されているが、港湾口、5、6号機放水口北側、南放水口付近のストロンチウム90は低い濃度で推移。5、6号機放水口北側、南放水口付近の全β濃度に変動は見られていない。
- ・海側遮水壁について、鋼管矢板の打設作業を9/10より再開し9/22に打設完了。引き続き継手処理を実施し10/26に閉合完了。今後、海側遮水壁内側の埋立・舗装を実施する。



<1号機取水口北側、1、2号機取水口間>



<2、3号機取水口間、3、4号機取水口間>

図6: タービン建屋東側の地下水濃度

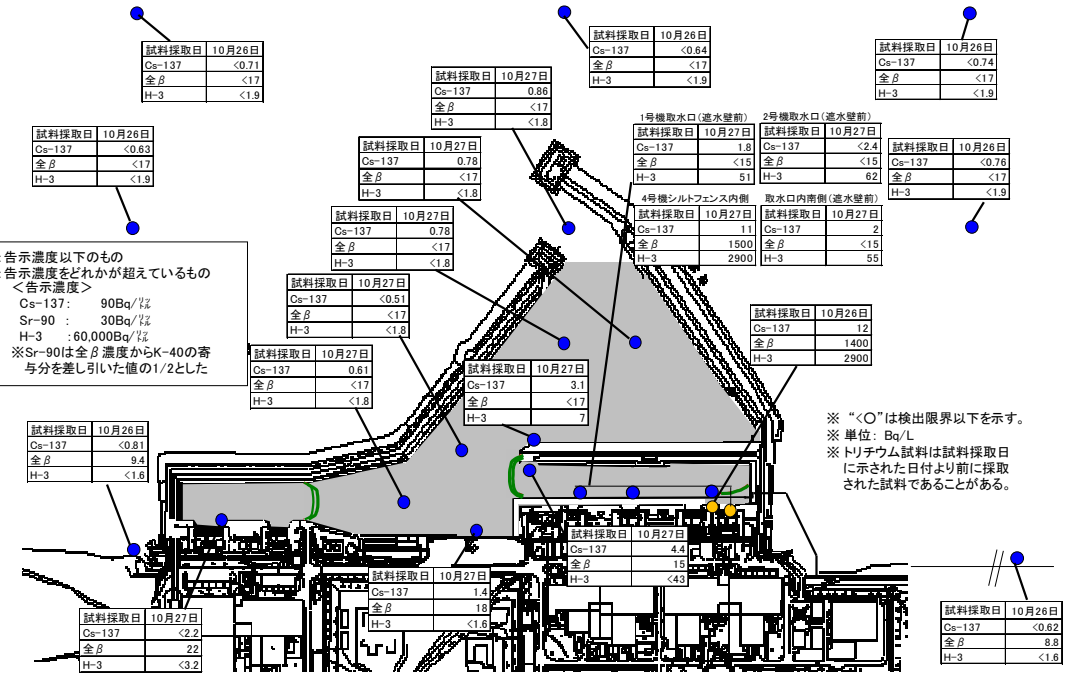


図7: 港湾周辺の海水濃度

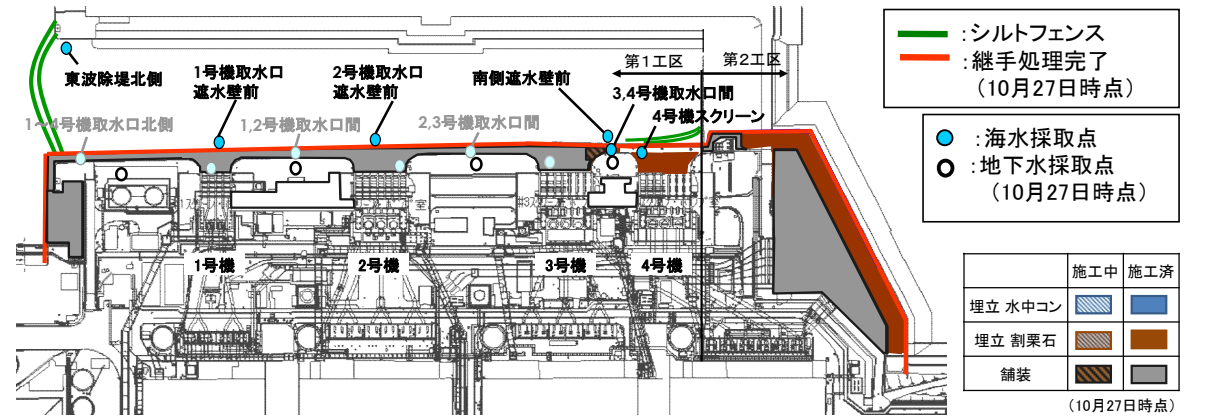


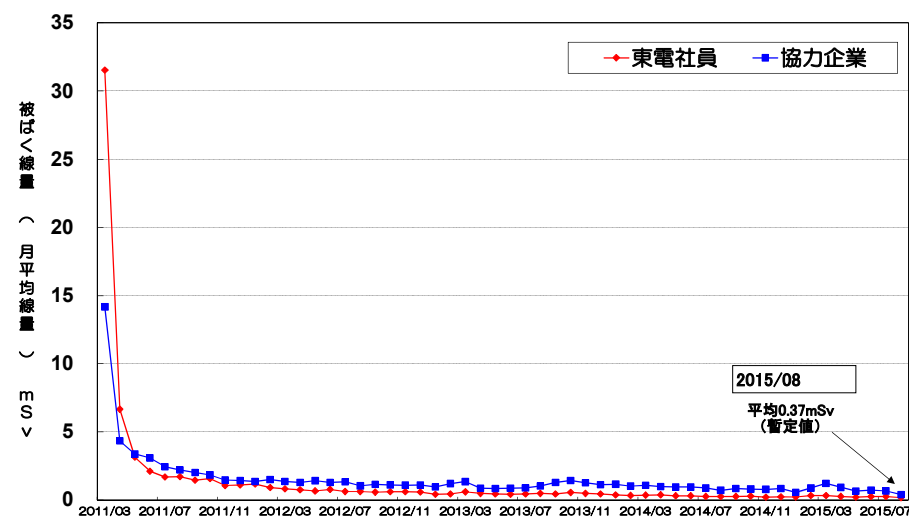
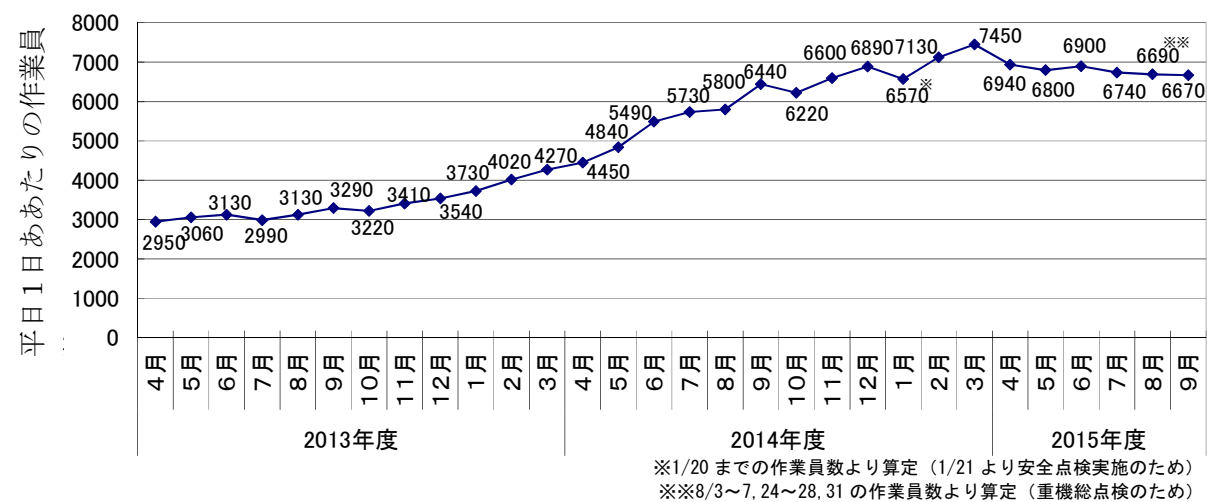
図8: 海側遮水壁工事の進捗状況

## 7. 必要作業員数の見通し、労働環境、労働条件の改善に向けた取組

～作業員の被ばく線量管理を確実に実施しながら長期に亘って要員を確保。また、現場のニーズを把握しながら継続的に作業環境や労働条件を改善～

### 要員管理

- ・1ヶ月間のうち1日でも従事者登録されている人数(協力企業作業員及び東電社員)は、2015年6月～8月の1ヶ月あたりの平均が約13,900人。実際に業務に従事した人数1ヶ月あたりの平均で約10,900人であり、ある程度余裕のある範囲で従事登録者が確保されている。
- ・11月の作業に想定される人数(協力企業作業員及び東電社員)は、平日1日あたり6,740人程度※と想定され、現時点で要員の不足が生じていないことを主要元請企業に確認。なお、2014年度以降の各月の平日1日あたりの平均作業員数(実績値)は約3,000～7,500人規模で推移(図9参照)。  
※: 契約手続き中のため11月の予想には含まれていない作業もある。
- ・福島県内の作業員数はほぼ横ばいであるが福島県外の作業員数が若干増加したため、9月時点における地元雇用率(協力企業作業員及び東電社員)は若干減少し約50%。
- ・2013年度、2014年度、2015年度ともに月平均線量は約1mSvで安定している。(参考: 年間被ばく線量目安20mSv/年≒1.7mSv/月)
- ・大半の作業員の被ばく線量は線量限度に対し大きく余裕のある状況である。



## ➤ 熱中症の発生状況

- ・今年度は10/28までに、作業に起因する熱中症が12人、熱中症の疑い（軽微な熱中症）等を含めると合計15人発症。引き続き熱中症予防対策の徹底に努める。（昨年度は10月末時点で、作業に起因する熱中症が15人、熱中症の疑い等を含めると合計32人発症。）
  - ・昨年度に比べ、作業に起因する熱中症の発生件数は減少し、熱中症の疑いを含めた熱中症においては半減となった。
  - ・熱中症予防対策としては、従来から実施しているWBGT※の活用、14時から17時の屋外作業の禁止、クールベストの着用等に加え、昨年度に継続して、WBGT 25℃以上では連続作業時間を原則2時間に制限することや、WBGT 30℃以上では作業を原則禁止する等の統一ルールを実施した。なお、統一ルールは更なるルールの明確化を図るため、見直しを実施。
  - ・次年度においても統一ルールを継続的に実施し、ルールの定着化を努め、更なる熱中症の発生防止に努める。
- ※WBGT（暑さ指数）：人体の熱収支に影響の大きい湿度、輻射熱、気温の3つを取り入れた指標

※WBGT（暑さ指数）：人体の熱収支に影響の大きい湿度、輻射熱、気温の3つを取り入れた指標

## 8. その他

- 櫛葉遠隔技術開発センター開所式
  - ・ 現在、東京電力（株）福島第一原子力発電所の廃止措置推進のため、国立研究開発法人日本原子力研究開発機構（JAEA）が遠隔操作機器・装置の開発・実証試験施設（櫛葉遠隔技術開発センター）の整備を進めているところ。
  - ・ 本施設の研究管理棟が完成し、一部運用を開始することとなったことを受け、10/19に開所式を開催。
  - ・ 引き続き、試験棟の整備を進め、来年度の本格運用開始を目指していく。
- 1/2号機排気筒点検結果について
  - ・ 福島第一原子力発電所1/2号機排気筒については、2013年8月に実施した点検（初回点検）により、地上66m付近に斜材の破断事象が確認されたため、1回／年の目視による点検を行っている。
  - ・ 2015年9月に点検を実施した結果、初回点検時に確認された変形・破断箇所以外に新たな損傷等は確認されなかった。また、変形・破断箇所も有意な変化は確認されなかった。